

えんぼとたんぼの始発駅

里山ビオトープ二俣瀬

# 会報 第247号

2022年2月23日

里山ビオトープ二俣瀬をつくる会

編集責任者：原谷 一誠

## 1. 活動報告（事務局 記）

- 2月6日（日）会員14名と市民センターの岡崎さんが参加し、杉材を用いた湿地帯観察路脇の整備、竹林整備、除去草の搬出・焼却の作業を行いました。
- 2月8日・11日ビオトープ須賀河内川のコンクリート橋（仮称”里山橋“）北の車置き場の石組みコンプリートではありませんが完了しました。辻野会員と岡崎支援員と原田会長の3人でバラス運搬と一部石組みし、11日に修正し完了しました。
- 2月20日（日）会員13名が参加し、椎茸の駒打ちおよび原木置き場の整備、池内の渡り橋補修、不用品の撤去・解体（カブトムシの森に置かれたバスタブ）、ため池内の除草の作業を行いました。

## 2. 今後の予定（事務局 記）

◎行事

- 3月6日（日）維持活動（修復作業）
- 3月20日（日）維持活動（エコアップ、修復作業）、会計監査

## 3. 来訪者の声

★1月26日（水）（住所・氏名 記載なし）

暖かかったので来ました。空気が気持ちよかったです。山のほうへ行ってみます。

## 4. 会員の声 「ビオトープひねもすのたりのたりかな」（原田満州夫 記）

2月のある日午後3時東屋の南、須賀河内川を挟んだたんぼの土手、日当たりもよくヨモギを採取していると反対側の土手に子サルが観察に来る。あおむけで大腿を広げたり・横になったりしてこちらの動作ヨモギ採りを観察している。変わってこちらが子サルの動きを観察しあつた、子サルも逃げもしないでいろいろな動きをとる。立春とはいえ2月の寒い中の一時的な小春日和で本当にのどかな時間を過ごすことができた。

ヨモギもたくさん採取し2日後にはヨモギ餅となって子サルを思い浮かべながら食した。

## 5. ビオトープ関連：「山口県の昆虫たち」 (管 哲郎 記)

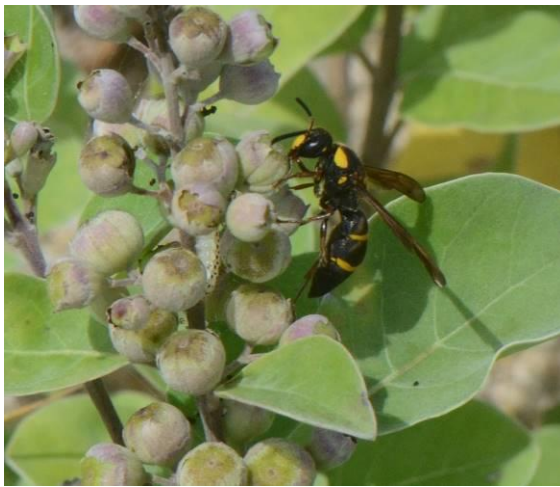
### (72) オオフトオビドロバチ *Anterhynchium flavomarginatum micado* ドロバチ科

ハチの研究者であれば、「狩りバチ」と呼ばれるハチの一種で大変スタンダードなハチであることにはなりますが、一般の方には全く見も知らぬ「ハチ」でしょう。そもそもこの昆虫が何をやるハチであることなのかもわからないと思います。有刺類ですが人を刺すことは殆どありません、捉えた幼虫に麻酔をするために針を使います。

「ドロバチ」は乾いた泥を飲んできた水で混ぜ、ドロ団子にして巣に運び巣をつくることから、その名がつけました。また、巣の形状も様々で、竹筒やカヤ、甲虫の脱出口などに泥で仕切るもの、トックリ状の巣をつくるもの（トックリバチ、スズバチ）などがあります。

活動期は春～秋にかけて活発で、主にガの幼虫を狩ります。ガの種類も多く、毛虫やドクガなどは不快害虫として人間に嫌われていますが、このハチたちが一生懸命に働いて、多くの蛾の幼虫を取り除いてくれるのです。人間にとっては“益虫”かもしれませんね。

「狩りバチ」の種類も多く、ドロバチ科のほかにセイボウ科（寄生バチ）、アリバチ科、ツチバチ科、クモバチ科などがあり、ハエやゴキブリ、ウンカ、ヨコバイ、バッタ類、クモ類などをひそかに駆除してくれています。自然界の調和をうまく調整しています。人間の都合で農薬を使用すると、これらの昆虫のバランスが壊れ、人間に必要な食べ物（稲や野菜や果物など）が、よく育たなくなります。たかがハチですが、生態を知ってみるといなくてはならない昆虫のようです。



オオフトオビドロバチ 蛾の幼虫を狩る ➡



### 参考文献

梶 真史ほか、2017. ポケット図鑑日本の昆虫 1400

②トンボ・コウチュウ・ハチ、319pp, (株) 文一総合出版、東京。

田中義弘、2012. 狩りバチ生態図鑑、192pp, (株) 全国農村教育協会、東京。

## 6. 会よりの連絡事項

- 1) 3月20日の作業と会計監査が終わりますと、今年度の行事は終了です。次は4月3日の来年度の総会です。場所は、二俣瀬ふれあいセンターを予定していますが、コロナ禍の状況によっては、ビオトープの東屋になるかもしれません。

## 7. 編集後記 (若林 正治 記)

コロナ騒動に終わりは無いようでワクチン2回接種したにも関わらず爆発的に増えている。最近身近でも感染者や濃厚接触者の話を聞くようになった。政府は3回目を早く打てと騒いでいるが、効かないワクチンで体調崩すのも嫌だ。春が来れば落ち着くのでは？と勝手に期待してるが、草刈騒動は今年も始まるんだな。今年も頑張りましょう。